

男子ハンドボール競技における世界トップレベルのシュートブロックの実態

矢野 世人 (201812028、ハンドボールコーチング論)

指導教員：山田 永子、會田 宏、藤本 元

キーワード：有効なシュートブロック、GKの反応、防御の個人技能

【目的】

本研究では、世界トップレベルのシュートブロックの実態、すなわち有効なシュートブロックに関連している要因を明らかにし、シュートブロックの技能向上を目指す指導現場へ有用な知見を提供することを目的とした。

【方法】

近年の EHF チャンピオンズリーグのベスト 4 以上であり、なおかつシュートブロックの重要度が高いディフェンシブな 6-0 防御システムをしているドイツのクラブチーム THW Kiel (以降キール) とスペインのクラブチーム Barca (以降バルセロナ) を対象とした。シーン数は、キール 18 試合 147 シーン、バルセロナ 11 試合 97 シーンである。分析項目は、攻撃(以降 OF) の分析項目、防御(以降 DF) の分析項目、ゴールキーパー(以降 GK) の分析項目に分けて分析した。OF の分析項目は、移動軌跡、歩数、ドリブルの有無、シュートエリア、ステップパターン、フォワードスイングの 6 項目を分析した。DF の分析項目は、シュートブロックに関わる人数とブロックの隊形、ジャンプの有無、ジャンプの方向、ポストの影響の有無、ヒットの有無の 5 項目を分析した。GK の分析項目は、GK の動き、シュート結果の 2 項目を分析した。分析結果を比較するため、カイ 2 乗と残差分析を用いて比率の差の検定を行った。有意水準は 5%未満とした。本研究では、「シュートブロックにヒット」、「GK がシュートコースに動く」、「セーブおよび枠外」を有効なシュートブロックとして定義し、それらに関連する項目を OF の項目、DF の項目から分析した。

【結果】

1. 中央(9m 内) エリアのシュートの場合、シュートブロックにヒットすることが有意に多く、右バック(9m 外) エリアがシュートブロックにヒットすることが有意に少なかった。
2. ステップシュートの場合、シュートブロックにヒットすることが有意に多かった。
3. アンダーアームの場合、シュートブロックにヒットすることが有意に多かった。
4. シュートブロックの 2 人目のジャンプが無い場合、シュートブロックにヒットすることが有意に多

く、ジャンプが有る場合、シュートブロックにヒットすることが有意に少なかった。

5. シューターが曲線的に移動するシュートの場合、GK がシュートコースに動くことが有意に多く、シューターが直線的に移動するシュートの場合、GK がシュートコースに動くことが有意に少なかった。

表1 GKの動きと移動軌跡との関係

		直線的に移動	曲線的に移動	切り返しながら移動	合計
シュートコースに動く	生起数(n)	57	52	31	140
	生起率(%)	56.4 [†]	77.6 [*]	72.1	66.4
シュートコースと反対に動く	生起数(n)	39	15	12	66
	生起率(%)	38.6 [*]	22.4	27.9	31.3
動いていない	生起数(n)	5	0	0	5
	生起率(%)	5.0 [*]	0.0	0.0	2.4
合計	生起数(n)	101	67	43	211
	生起率(%)	100	100	100	100

$\chi^2(4)=12.023$, $p<.05$ *:有意に多い, [†]:有意に少ない

6. シューターが 3 歩からシュートする場合、GK がシュートコースに動くことが有意に多く、シューターが 1 歩からシュートする場合、GK がシュートコースに動くことが有意に少なかった。

7. スタンディングシュートの場合、GK が動いていないことが有意に多く、ジャンプシュートの場合、GK が動いていないことが有意に少なかった。

8. オーバーアームのシュートの場合、GK がシュートコースに動くことが有意に多かった。

9. ステップシュートの場合、ゴールが有意に少なく、枠外が有意に多かった。

【結論】

OF の項目であるシュートエリア、移動軌跡、歩数、ステップパターン、フォワードスイングが有効なシュートブロックに関連していることが明らかになった。DF の項目からは、シュートブロックの 2 人目のジャンプが無い場合が有効なシュートブロックに関連していることが明らかになった。有効なシュートブロックに関連している DF の要因をさらに明らかにするためには、DF の分析項目を精査し、さらに研究を進める必要があると考えられる。